

## ＜スタッフ紹介＞

| 役 職 | スタッフ名  |
|-----|--------|
| 部 長 | 森山 あづさ |

## ＜特色と概要＞

ここ数年で進行期肺がんのみならず多臓器に対する化学療法は急速に進歩し、従来からの細胞障害性抗がん剤に加えて、分子標的薬、免疫チェックポイント阻害薬などが一般臨床でも多く用いられている。肺がんの重要なドライバー遺伝子(=がんの発生、増殖の原因とされる遺伝子)であるEGFR、ALK、ROS1、BRAFに加えMET、RET、K-RASの解析も進み、また免疫チェックポイント阻害剤であるPD-1/PD-L1抗体にCTLA4抗体を組み合わせて投与する免疫複合療法も肺がんのみならず多くの固形癌で投与されるようになった。

注目すべき抗がん薬としては抗体薬物複合体(ADC; Antibody-drug conjugate)の開発が進み、HER2、TROP-2を認識するADC薬が有効性を示している。またEGFRexon20はEGFR阻害剤の効果が期待できない遺伝子変異であったが、アミバンタマブ(Amivantamab)はEGFR/cMETに結合することで下流シグナル伝達を抑制し、抗体依存性細胞傷害を主な作用機序としてもつ、2重特異性抗体(bispecific antibody; BsAb)が承認された。

しかし、新しい分子標的薬、免疫チェックポイント阻害剤(ICI=Immune Checkpoint inhibitors)、免疫複合療法が肺がんのみならず、乳がん、腎がん、消化器がんなど多くの固形がんでも承認され、頻用され、使用が一般化するとともに本来は稀な発生頻度として認識されていた予測困難な副作用に遭遇するようになった。倦怠感、脱力、原因不明の呼吸苦など、一見不定愁訴にも思われる様々な症状が出現し、従来の抗がん剤には診られない副作用に対応することが求められるようになっていく。

がん治療自体が患者への大きな負担となる症例もある。年齢、全身状態、合併症、病状に合わせた治療選択がさらに重要となってきた。がん薬物療法専門医として積極的な抗がん剤投与とともに症状緩和を中心とする緩和医療の介入・移行も重要な課題として取り組んでいる。

緩和外来は2023年10月から泌尿器科の射場部長、乳腺・内分泌外科の森島部長も加わり、週3回院内の患者を中心に診療を行っている。

2024年11月には患者会らふと共同で当院にて市民を対象とした緩和講演会を開催することができ、医療者含め多く

の市民の方に参加して頂く事ができた。

当科では適切な治療を選択できるよう、通常の診療に加えセカンドオピニオン目的の受診も可能である。

肺がんを診断を受けた患者、治療中の方でセカンドオピニオン希望の患者は、主治医の医師と相談の上、当院へ予約制で受診可能。診察予約と受診前に画像と情報提供書が必要となる。

大阪府の成人病検診に参加しており、泉佐野市をはじめ泉州地区4地区の住民健診の胸部2次検診を施行し、呼吸器疾患の早期発見・早期予防に取り組んでいる。

## ＜実績＞

2024年5月26日 緩和PEACE研修会  
2024年7月7日 エキスパート看護授業(院内)  
2024年11月16日 緩和講演会、患者会らふ共同開催

2025年1月29日 泉佐野泉南医師会看護専門学校  
“肺がんの診断と治療”WEB授業

2024年度;  
肺がんおよび胸部異常陰影新患者数＝ 193名  
緩和外来新規患者数＝ 31名(入院外来新患を含む)

## ＜今年度の反省と来年度への抱負＞

肺がんに対する専門的治療とともに、緩和治療と並行して集学的治療に取り組んでいく。

2次検診を広く行う事で早期発見に努める。

## ＜施設認定、関連施設＞

日本呼吸器学会関連施設

2025年4月1日から総合内科・感染症内科内へ合併し、今後も腫瘍・緩和関連の業務とともに総合内科としての勤務を行っていくこととなった。

また、非常勤医師として勤務して頂いていた関西医大の倉田医師は2025年5月をもって勤務終了となる。